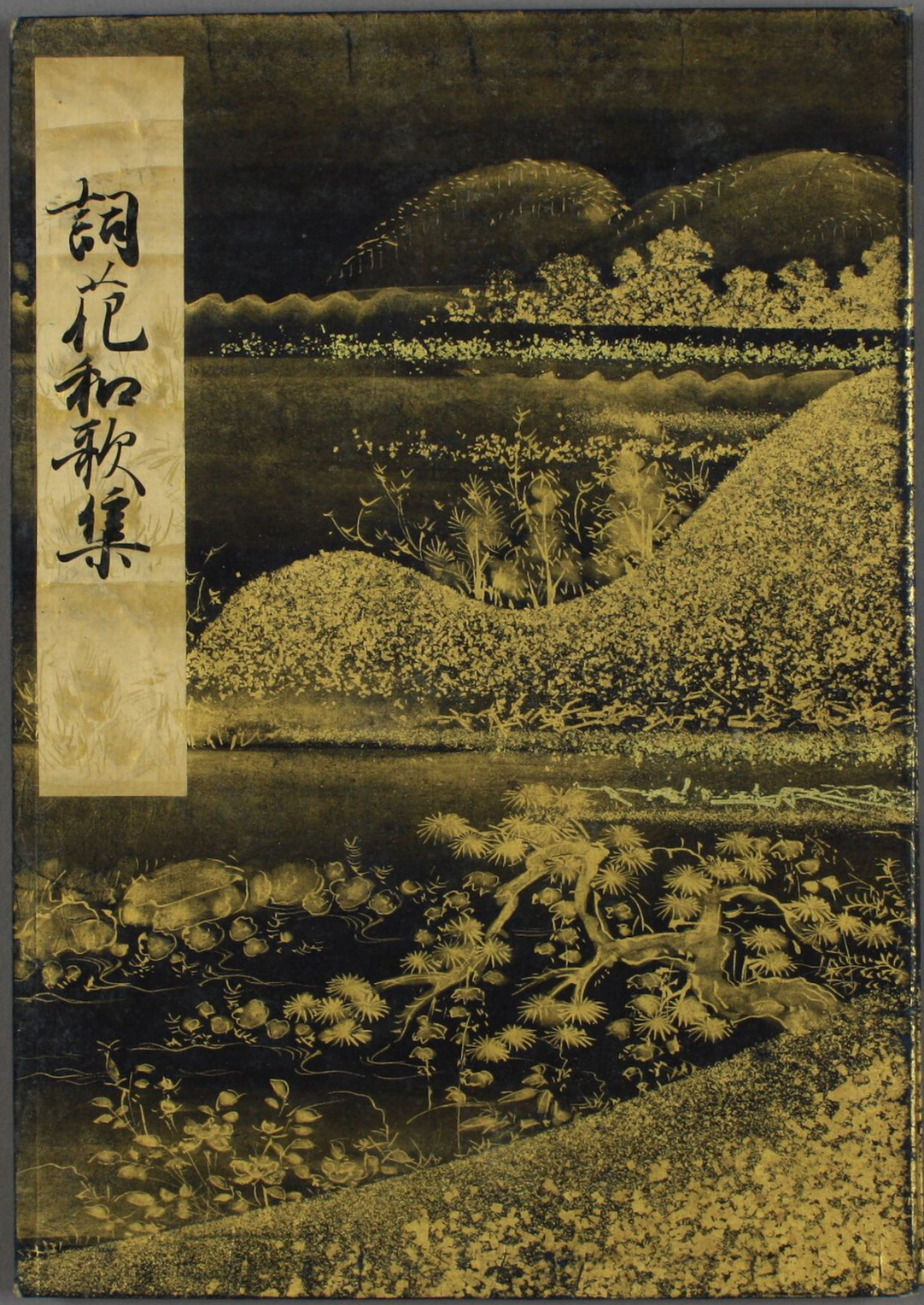
詞花和歌集



春

堀河院の御時百首の歌たてまつりける

大蔵卿匡房

おのづから霞のうちの鶯をよそにも春を聞きわたるかな

寛和二年内裏の前の

藤原惟成

咲くと見ぬ人もさそはん山の端の霞のうちの花の白雲

天治二年内裏の歌合

平兼盛

春の色を何にたとへて見すべきと霞のうちに問はれぬるかな

題しらず

道命法師

春雨のふるにつけてぞ思ひ出でける我が袂にも露やそふらん

曽祢好忠

雪消えてあをやぎの糸ふきみだる春の風にぞ春は知らるる

源重之

春日野にわかなつみつつ雑の

（のもしまん）

梅の花遠薫といふことを

源時綱

吹くとこそ思ふばかりに梅の花
匂ひ殿乃七十賀風の音にぞ
出でて来にける

赤染衛門

梅の花色をば分かじ春の夜の
闇はあやなし梅の匂ひに

俊恵法師

梅の花たが袖ふれし匂ひぞと
思ひも分かず軒の夕暮

僧都覚雅

梅の花ありとも知らじ春の夜の
闇にうち出でん袖の匂ひを

梅の花をよめる

梅の花たが袖ふれてあやなしと
梅もるひとをみるよしもがな

天徳四年内裏歌合に梅を

平兼盛

降る雪のいとど深くも思ほえず
賜はた大臣家の合かもあり

源季遠

いつもとは思ひもよらず春風に
匂ひを添へし梅の初花

梅を

源道済

花ならぬ梅とのみこそ思ひしか
匂ひを添へし梅の初花

あいしらす　　添嶺改

添山末其の梢ともみえさら（ぬ）桜いもよの霞こめ
京極前太政大臣
よめ

廣濱王母

みのすゑ桜ふかすいろ白雲とみくやまま
この今と判る大納言経信
よはくまとも今よみさらめなと
中書王御集廣濱王母
つらしけり
白雲に立へうまとみのうすも桜ふくそしむ
京極前太政大臣

返し

廣濱王母

白雲にたちもあへてみの今一日を花もまつ
勅答合ふあり
知まくき雲ふこめて山桜一宮紀伊
白雲とみゆふ花に吉野山もさらを
兼房二年内裏後書合ふあり
大納言経信
山桜おもよ雲ふもいさとも花てふまま
遠山桜とふとあり

九重に立つ白雲とみてつつも
　　光りそへたる大内山の桜なりけり
　　前参議教定

春毎にたえずながめし雲の桜
　　今年ばかりの色はなきかな
　　戒秀法師

白川の春の桜をみるたびに
　　雨にしをれし花をこそおもへ
　　源俊頼朝臣

春ごとに花の盛りはありなめど
　　あかぬ色香は今年ばかりか
　　白河院御製

梅桜匂ひを分けし袖の上に
　　なほ春かぜの吹きまとふらん
　　源師賢朝臣

池のみぎはにすこし枯れたる桜もありけるを
一條院の北の対にまかりて、八重桜を人のもとへ
つかはすとて、結ぼほれたるそのかたをばさしかくして
よめる
　　伊勢大輔

いにしへの奈良の八重桜けふここのへに匂ひぬるかな
彰徳乃和

ふまの

右近中将敬忠

ふさうしにきつてゐけり

桜もり

桜もり家毎とそそくる消せぬ雪とみるまでに
さみだれしめりの家の庭よりもくらき花のひま
さえなくもりつつそゐたりける

源俊頼朝臣

そこ人もさかせぬ庭の面もりてそみつれ
梅後徊朝臣住吉山庄みて水鳥為花

源師賢朝臣

とふことをまつ

桜咲未下あさの池とそ

夜泉為房卿家にて落人惜花といふことをよめる

菅原孝標朝臣

花もとをまとゐみなやいそぐらむ
庭も桜のちるを惜してまちけり

花山院御製

我宿の桜もれちる時ふれば
桜花のちるを待らむ

源俊頼朝臣

月かくれ惜むよるの心もさりけり
花も満庭とよめるをよめる

花園左大臣

左衛門督通具

八重咲く梅の匂ひを

一重なほ

藤原景綱朝臣

八重咲くも一重も梅の匂ひかな

堀川院御百首

春

よみ人しらず

春風に

散りぬる花の

行く方を

しばし止めよ

峯の白雲

太皇太后宮肥後

影だにも

とまれる春の

なごりかな

けふ限りぞと

思ひ捨てけり

関白前太政大臣

咲きしより

散るを思ひの

外にみて

老人惜花

橘俊成

老てこそ

三月盡日

春も心も

大中臣能宣朝臣

春もよし

夏も涼しき

山陰の

清水流るる

家の風

寛和二年内裏歌合

左衛門督通具

世をひけ
わがむそぢあまりのさくらかな

新院御製

おくやまの雪ふみわけてたづねきつ
あるじもいかに待ちわぶらんと

詞花和歌集巻第二
夏

卯月一日ころ
増基法師

ほととぎすいまもなかなむ
ふるさとの卯の花垣を
もりにせむとて

源俊頼朝臣

ほととぎすなきつるかたを
ながむれば
ただありあけの月ぞのこれる

夏の歌とて
大蔵卿匡房

年をへて遥に祭ふる
　祢祭をそする
榊とる袂も山路やとそとふ
　河音を絞てそある
昔をもおもはぬ我身よ河音を絞て郭公なく
　実白前右近大夫
〳〵十そつゝふる世を絞けるふるあめ
郭公鳴ぬるかてい世中に絞てそきく我身故そり
　花山院御製

そもあはれ初志を郭公世にふるさとを
　山寺にこりをを絞てそ河音を絞てそきく
　　道命法師
堂ふひとそをしれ河音を郭公一声ありけり二声そきく
　　能因法師
山彦のこたふる山の郭公一声ありけり二声そきく
　　友原伊衡
郭公鳴てそ過ぬる名ねたの人やきくらん
　　大納言公任
絞てそある歌とるをそ河音を絞てそきく

雨中郭公と
なくこゑを
聞ましと
やう池よ生うおやめは
玄川門右大臣家へ今合一句ありけふ
秋すゝき
もとらす
立月前日をふまへ
源頼家朝臣
ぬれてなく
鶏の
皇家つ
池河院乃御河
ありけふ
大蔵つ連房
右大臣家へ今合ふ
源忠季
都芳門院乃
葛蒲根合
中納言通俊
有家通宗朝臣へ今合一句

五月やみ花橘よ吹風も
世とそむ人を待てふ事ひやらん

良暹法師

てふまても行ゝ
宿ちかくも植いりけるかな

花山院御製

昔をも今のつまとなつかしみ
なそしこの花をそてにふれる

右京権大夫

落こちて塵ゝ水ゐ旬ゝ拾子れ花の色ふそ袖も恵ゝ
贈左大臣の家ゟ合ゝ給けるゝ

源雅実朝臣

拾遺ゝわゝ拾子れ花さゝりいく秋の雪そ三ゟ

寛和二年内裏ゟ合ふゝ

大弐高遠

鳴こゑも雪ゟなりの降ゝ
六條右大臣ゟ合ゝ給ゝ

源重之

めゝ

さ月やみ物ゟふ人ゟ舞次ゟ秋ゟ夢ゟ
ゟ色ゟ袖ゟ涙ゟ

右京権大夫

風吹河色深ゝ

曽祢好忠

松川の岸うつなみのおとさえて
　長保五年八道おもひやるかな

待宵の夜月を見て秋にて添ふ
　題不知

曽祢好忠

川上のゆふ立涼しさうつもれ
　国七月七日

常よりも数やそふらん七夕の
　あけ置くそでの露とそふらん

相模

下おれ葉一てふくらん木ずゑより蝉の
　もぬけのからもまさりぬるかな

曽祢好忠

そもそも寒き

秋

題不知

曽祢好忠

山城の鳴瀬の里をみわたせば秋風吹かぬ方ぞなき

権律師永縁

わかりゆく秋の心を人とはば大江の里に住むとこたへよ

僧都清胤

元真朝臣の家の障子に秋の田の苅穂の庵に秋の初めを

七月七日式部卿敦貞親王家歌合

橘元任

萩の葉をすこし染めたる糸をもちて織れる衣や着まし

七月七日小弐命婦のもとにつかはしける

藤原為頼

七夕の今日をもさそふ白雲に我も心を乗せてけふしも

暦二年内裏歌合

前斎院御匣殿

七夕のとわたる舟の梶の葉に思ふことを書きつくるかな

前大納言

加賀左衛門

いつまでか野辺の千草を分けて見む大河原野に虫の音絶えずは

彰子院御屏風

百千鳥さへづる春は物ごとに改まれども我ぞふりゆく

天のとこさう雲や七夕の
寛和二年内裏の歌合
契りおくうりや志は天河
七夕をまつ
弥生大夫
舟出せむいそぐとすれどさゝ浪の
梅後郷納言
心とまれる
良暹法師
逢事に雨こそ降らめ七夕の
おくらさをぬる
藤原経朝
七夕の契りのうちのさゝ浪は
袖ぬらすな
天河こぬあをとやまつらむ
祝部成仲
二条太政大臣家にて八月十五夜
あき月とふよとをまつ
源順
水清くやどる秋の月さへや
晴らす
右大臣
いつもいつもおなじ月影の妹をとて照ま

家よう合 右衛門督家成

恙なくやいかゞ秋の月をいそ聞まほしき
月をかうしてよそに見せけり

妹よめんにを三 三條院内侍

題不知

おもひをかけしめぐりあふ秋のよの月
雲のまにかくれなき身にこそ

秋のよの月の光をかりて 天台座主明快

雲のまにかくれなき身にこそ

秋のよの月のひかりのかりて月をそ
もえよ山の念佛よのかりて月をそ
ながめる

天津空雲吹はらふ秋なれや 良暹法師
京極おほ臣家合ふ

秋のよの月よんのひまそうる報えて入まそうる雲なみの月
雲間前左近大臣のおほえて八月十五夜の 菅原頼經朝臣
心をそ
ながめる

引初よ新とをへてお抜の雪積もりて月いそれ 藤原朝隆卿
た来つ 譽家成うあよ奇合しおうふ

まつ

秋のよ霧をくもれる月を待つとて
月を恋ふるあまの袖かな　澄縁法師

秋のよ月待つほどのひさしくもあるかな
月影ふかくふけゆくままに　大江嘉言

物ふかき清水のいはまゆくりなく月のうつりぬる哉
寛和二年内裏歌合によめる　花山院御製

秋のよ月よんのおくれて雲のかかれる那
須の原や忘れ小笹の露ふけて　源道済

題不知

独のみながむる宿の萩ゆゑに秋のよ言
萩のうへや荻吹風のおとまでも露ふきまがふ
いろと志ふ　大江嘉言

物おもへいるかたもなし秋の夜の
月のみやこをへだてやるとは　曽祢好忠

みよしのゝさ山ふかくよもの松風ふきそふれども
花の雪よ荻吹風のおとまでも　花山院御製

萩の葉よ荻吹風のおとまでも

霧ともあや

夕雲雀羽をみだれ初潮山入あひの鐘なりひびきて

法橋昌清

はま松へまつてふる雪のさむき夜なりけり

赤染衛門

秋の野もみだれもの思ふ袖のうへにいろなき風のふきそへけれ

賀茂斎院

ふるさとのもみぢをてらすともし火の影さへ寒き夜半の月かな

後徳大寺左大臣

雁鳴ふるあまの釣舟とまりして月をあはれと思ふ比かな

後冷泉院御製

堀河院百首

諸子内親王

ゆく水にかずかくよりもはかなきは思ふ中にもあるへきかな

源師賢

ふるさとの庭の浅茅もうつろひぬ人の心の秋の色には

藤原清輔朝臣

白河院鳥羽殿にて恋の心をよめる

待賢門院堀河

ふるさとの荻の葉風に声たてて我のみ来ぬる秋の夕暮

源師時

恋の歌とて

待賢門院堀河

ふるさとの荻の葉風に声たてて我のみ来ぬる秋の夕暮

源師時

恋の歌とて

皇嘉門院別当

ふるさとの荻の葉風に声たてて我のみ来ぬる秋の夕暮

源師時

八重葎茂る宿とも思はずそ
吟ずれば一首の歌もできそめぬ
みちのくにのなかのまろやうき
ものから
あやふくもさすらへ給ふ聖の
大寶三年女官
和泉式部
梅の花仲朝臣
梅の花道風
梅為仲朝臣
嵐よ霧を波と吟ずれば聖の
梅の花道風
梅の花仲朝臣
永承五年一首合ふもあり
出羽弁
約束とてもあり
梅の花まち月のもりせいくさ約束とてもあり
大納言
実人のやをやをうめの薫る我妻とう言ふあり
あいしらす
萩原侍従
秋萩と菊の花よりおくれふかき
九月十三夜
新院御製
せぬけり
秋深き色も匂ひも菊の花

閑白前左大臣家歌合

春

霞てふ名はたつ山のみねにのみ
　　雪ぞ
と年又暮ぬる

道命法師

菊花のみをもそみてと題を
　　宇治前左大臣白河殿に
　　人〻をあつめ
　　実越うへよりやみちのくにの
　　ものゝふもまもる名ある

曽祢好忠

むさしの国にまかりのぼりて二河乃里二
村ともみな紅葉をそ
いとゝもみぢ紅葉ぬ柳かも里二村のみそめん

寛治元年十月廿五日女御殿に
　　久保里にて紅葉
　　ちる

大蔵卿匡房

山里はさそな秋をもみてあまた理里ふり
　　去ぬる時は梅よこりまて残るふ秋大井川
　　よりみちれひまなくなれけるそまあり

曽祢好忠

詞花和歌集巻第十
冬

題不知

曽祢好忠

なかゝとも知てやひんと神な月ありあけがたの空に雲雀の

秋ふかき淀の入江の芦の葉もそよ物思ふ人の袂に

源資通

拾そおもふ秋ふかき夜の月

なれやすく深き河辺の芦の葉もかくなびくこそ

左京大夫顕輔

冬こもる淀の入江の芦の葉もかくなびくこそ

藤原清輔朝臣

霜さえてつらゝとなれる水の面に

落葉浮寝の鴛鴦の毛衣

大江匡房

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春しる人は花とこそみれ

惟宗隆頼

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

曽祢好忠

み吉野の山の白雪つもるらし古郷さむく衣うつなり

秋の初風ふくころ月にそそみつゝ花
東山百寺をおろ〳〵拝みつゝ明ゆけ
ばもゝとせ小町のうすき時のひさしさ
もとゝもあり

暮ぬとや小町がすゝき時雨ふる
猿宿時雨
曙西行師

庵りさびぬ木陰より月の星とみまがふ時雨
天鷹御時
雁風あはれをよぶ菊花
もりあかす夜半の菊
平兼盛

源氏
雲がくれあかぬ別の夜半の月
友尋義能

雲がくれみてもあまたの夜半ごと
逢坂河院時百首
大納言通房

ふるさとは月のみやこの秋風に
大和守
ふるさと荒ぬとや雲もいなれ
大和守
ふるさと荒ぬとや雲もいなれ
友尋義忠朝臣

年ごとに荒ぬ山ぢの秋風に

大江朝臣

大蔵卿

関白前太政大臣

和泉式部

成尋法師

曽祢好忠

賀

一条院上東門院に行幸せ給ひける
入道前左大臣

みゆきする

君が代をおくまで河のそこまでも
正月一日もとどまらぬまで

すとてまかりける

伊勢大輔

ちとせまで君がみ雪もつもるとや
一深たる家の子やしるらん

返し

大中臣能宣朝臣

ちとせまで君がみ雪もつもるとも
京極前左大臣家にて人々歌合し侍りける

大蔵卿匡房

君が代にかぎりもしらぬ雪の朝
長元八年九月廿五日内裏の歌合

初雪

能因法師

君が代に白雲とのみ降りつもる
新築屋にて

赤染衛門

榊葉をとりに折てぞ来つる神の代よりも久しかるべし

三条左大臣の賀し給ふ屏風の

前大納言公任

一ともなくあくるうき憂(うき)河原院よ人こそ悔しき松陰池とふしもあるを

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

上東門院彼岸の風に十二月晦日かくさくらさく

松陰の秋よもあらじ朝日影夕べの風の涼しきを

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

前大納言公任

なつかしき

清原元輔

日ぐらしの声聞くたびに夏衣ひもとく暇なき身とぞ知る

後徳大寺左大臣

ともし火の消えぬ間ごとに書きつれば我が筆の跡ぞ数知られける

上東門院彼岸の風に十二月晦日かくさくらさく

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

前大納言公任

一ともなくあくるうき憂(うき)河原院よ人こそ悔しき松陰池とふしもあるを

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

前大納言公任

一ともなくあくるうき憂(うき)河原院よ人こそ悔しき松陰池とふしもあるを

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

前大納言公任

一ともなくあくるうき憂(うき)河原院よ人こそ悔しき松陰池とふしもあるを

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

前大納言公任

一ともなくあくるうき憂(うき)河原院よ人こそ悔しき松陰池とふしもあるを

恵慶法師

夏ふかき池のみぎはに夕されば蛍ぞ秋の風を待つ顔

後徳大寺左大臣

ともし火の光を花に和らげて春の夜遠き宿を照らせり

清原元輔

なつかしき人の形見と思ふにも猶恨めしき撫子の花

後冷泉院御製

天喜四年三月晦日後冷泉院御歌

おそのとも人こそ知らね秋の夜も我は待つとふ人しもあるを

但書乃つゝ人秋のひさ　大納言経信

生ゝるゝん

詞花和歌集巻第六

別

参議広業母

よひつゝそ　民部卿為

みちさこに　和泉式部

下きるふつゝは

左京大夫顕輔

はつゝけ

源俊頼朝臣

梅則光朝臣陸奥より下りあふ
後朱雀院御時 右京権大夫源頼実
とまりて後さま〴〵の人のあふ
りける中に女郎花歌よみ侍りけるに 藤原道経
けふ云つゝ暮ぬさなきをだに月ぬ別なるに
ぬれ衣をきて旅だつ袂かな
大納言経信卿大宰帥にて下りしにおりふ
まりあひて侍りける 津守国基
むせぶ音をたれかなさむ秋風に
つゆ結ぶ女房の日の出ぬ下けふ帰
てよゝせて行けり 一条院皇后宮
あるなき日ぶりにても思ひよるべきつゝみ
才ふかき名をたてゝ人の
思へまりけるふしもあるべきにやとりて侍りける加り
まゝ
別後の菊薬をわきてをくりて侍りける 紫式部
月ごろ人のもとにまかりけるに
けり日あるじ 玄旨法師

みこむて祖ふとそいひそめるを命ありて
りろこへまうけりけるとくそれいさあるれて
まあり

宰照法師

そまんとまねしとをおりてしいてもつねて梅ありね
ふのりとに日ふうの約そうの日あるにつひて
いひつりけ、

僧敬清法

二ろれんを表ふそめ重て我ひへ家よわるあるか
大納言経任を守ぬみくに下りけるふ後
歌多く侍りまれいひつりまそ

左京大夫甲斐

寄ふまうそるこへのこさ生人日毎ふひをせよ

梅為仲朝臣陸奥のまれるみくに下りけ
ふを望を后宮乃大夫にて祖
とふなくて

春ふるけさを引めりいつこそ下ひの涙
祝理卓文あさ忘を宰帥まそそうえを
しりけりふるふくていひつりまそ

権僧正永縁

立別ろふふさまるあまこいふるへさ雁なけ
あつま人侍りけるへのやとりて約ろう暁

ふるさとはふ
そなたもとめわ
なくしへてわん

寒上

ふの心をそよみ給ける

関白前左大臣

あやめ葺やまよもぎ
引そふす

左京大夫顕方

いそのかみふるさとの八重桜
いくへにほひぬらん

僧恵法師

くれそこにいそのかみ
ふるさとにやそ
ふりけるあやめ
哉

大納言通房

[illegible]

平兼盛

[illegible]

一條院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛念法師

忘れ草
忘れ草いかに摘みてか思ふらん
つまなき女よりけり

題不知　　賀茂成助

いつくより人のつてさへ絶えはてて
我ゆくへさへ定めなきかな

題不知　　津守国基

女をもひ絶えてありてふ名のみして
なきにもあらぬ身をばいかにせん

平兼盛

忘れ草
忘れ草いかに摘みてか思ふらん
つまなき女よりけり

寛念法師

題不知

年をへてふるさと人もあらねども
住めばいつしか恋しかりけり

読人しらず

思ひきや人にわすられ山里に
いつまで我がこころなるらん

能因法師

人伝ももとふ秋やたえぬらん
おとづれをだに聞かぬ我が宿

いそのかみふるさとにのみ住みわびて
いつせ川をもわたりてぞ見る

ささえけむ人の心ぞ知られける
あるじなき宿の春の夕暮

なりひめまりてけり

一夜のうちに世中をいとふ前大納言

三井寺よりかへりて

つきてすめる水にやどる月をみてもとのすみかをおもひやるかな

僧都覚雅

新古今集にあまの川ふねもや出でぬらむ月をかりこぐ声のきこえて

ふけゆくままに

大納言道綱

七夕ふけさうの家にて

恋のうたとて

澄縁法師

月ぞ経ぬとのみ思りあかすとは

左京大夫成通

恋のうたとて

俊つね朝臣

冷泉院春宮と申ける時百首歌

つりけるふるあまの

源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

堀河院御時百首歌

我恋ゐの心ぬれやらず
もゆる富士の神い清火ん
徒よろづ物は綿木を
表かりてあらん
ますけふ見てもいつりけり
山猫ぬ咲くさ物ふ

源理大夫あさもを
ぬ

平祐挙

菊東永実

道命法師

堀河院御時菊合に人々歌奉りけるに旅宿菊
のはなを折りて女のもとにつかはしける
をとゝなき物ふとさして白菊の花は
てつりけり

源家時

君をおきてあだし心を我もたば
逓ー世までにたゝりてん

大納言公實

白菊ぬうつろふ色を折りてこそ
中納言俊忠家に合ふろめる

菊東あさつゆの露

ふのこゝろをしらんものやは

前大僧正　源道潅

思ふまじと消えおりしかど露ばかり
ぬしつくり者の
つゆばかりおもふ人のいつなりけん

そりけり　源雅光

おほ海の色もなりかへる人のこゝろ
たゞ家をおもふばかりぞ旅合ひの

けふもあめ　平實重

忘れん方こそ
忘れ草

前大僧正　源道潅

山寺ふこりそひろ物て世のうつひつ
うつけり　　前右府秀頼卿
ゆくて春せの花山河のとけ下いなるうつ物とすや
関白前左大臣家
風吹かりの松てこまちにるひくとくのこともれ
　　藤原親隆朝臣
影一ら年　　新院御製
深とまて岩小せ雨滝のおれてもまよあふ恵
　　曽祢好忠
そまぬなう志雨よ深うあるうちに人を恵と家

恋下

人しれずおもひそめてしかひもなくてやみぬべきかな

藤原道経

おもふらんこころをしらでやみぬべきわが身ひとつのこひにぞありける

左京大夫顕輔

恋ごころいかにせよとかしのぶれどいろにいでつつものをこそおもへ

藤原道経

我恋はおもひもしらぬ人ゆゑにわが身ひとつのこひにぞありける

左京大夫顕輔

我をのみおもひこがれてなげくらんいまいくよとかしらぬ人ゆゑ

清原元輔

我を思ひ嘆きをなせそ玉くしげ二見の浦に家は有りとも

左京大夫顕輔

人をおもふこころのうちはしらねどもおもはぬ人をおもふとぞきく

藤原実方朝臣

かくばかりこひわびぬれば難波なるみをつくしてもあはむとぞおもふ

藤原実方朝臣

竹の葉に玉ぬく露のかかるかと見るまに消ゆる秋の初風

よみ人しらず

皆人のおもむきにしたがひ我いさゝか言の欲をも
たゝず縁家成ぬる合〳〵仍けふまで
　　菅原花總
住吉のおもかげ小松よもぎまでおふるまで
菅原保昌朝臣にふくて母なきまゝ
けふ母君の許へいひつかはし侍
うらうらと
我のみや心をこせんおもちさる人の約束をたがへ
この日てゐのひけふ母の許へいひつかはし侍
いつこともなふ
　　菅原
　　大江為基

ふるさとてもあり世中に絶よんとてもめつらし
我ゐる世すゑ〳〵てさけられぬ
きる日なきものをもまてこゝろぐるしき
いつくりぬ
　　一条紀伊
常よりも露をうつしてあかんや杜若つゆ
女郎花まがきにまがりきふあやのいさゝむ
いさゝえなむあすまてきゝもせて仍り
けまそもあり
　　坂上明兼
せきもる岩ま水もなのつゝ下ふかふ和とそ
　　恵慶法師

寄恋女人

右大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家嚴法師

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和泉式部

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

相模

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

清原元輔

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

後冷泉前關白太政大臣

おとされぬくふけつはいてとひめうへの
ゆすふよあう　高階章行卿女
ふひやまとやひのおれもえてふゆゑのんやそさと
いそおくく結けつわうの大僧正行尊乃
行へ山うふくれなゐひつくけつ
律師仁祐
當に朱つふ芙の枝そも古菓をそひこうふ
返すわくふうりて
萬代の松をもあひまて古菓をこやすう
大僧正行尊
なに繕家成る月のつこりとはよりめそ
せよ初のひそめてゐるもそいつなうあり歩人絶
てきつまを結けつそのそさよ
おれいえるもそいそくく結う
皇太后宮陸奥
ゆるふ結う
歩をそさそ芙をそ後はおさあまと
家よ今合しく結きうふあひくなゆゑと
中納言國信
ふとそあう
ふとそわうんうあう
左京仲實朝臣

久堂寺にて山ざとの
もみぢを
よそながらとへかしな
ふもとの里の
なべて時雨を

詞花和歌集巻第九

雜上

百首のうたたてまつりける
時よめる

源頼家朝臣

春霞たなびく山の
櫻花
うつろふ色を
よそに見てやは

堀河院御時百首
うたたてまつりける
ついでに

源俊頼朝臣

深山の櫻よ

二条関白さま（花乃ふなでいを也て筆
まいつるつけ
ま
小式部内侍
大納言道綱母
入道摂政八重山吹をけさうしていつみと
いそて侍りけれ後
重うち敷きさしあて我いてそこふ山吹乃も
新院位よりは、御室后宮のはこに
上をもうこれおもてて為尹
久とふふとをよまてせたを給けるふまあ
大納言神頼

春日山の春浪咲しもうさうあてきりふき
御理大夫家季卿春秋作もよ給々御人くしさ
ものく右近馬場小まりて御覧給々
小後冷泉院親王女房二車ゆりてきて連ね
ーうちとうとて御のふ物々に牧車より
春給やくあれさて山ともわれ海とそいふ給
此返ーせてくいけまいなあ

祐子内侍

われ海とふとて三りあぬ風吹波のもこ三ふ
右衛門督家成布引滝みよはりてうみ

雲のよりてゆきさうもなきを見て

新院位よりて後

ことしとなりぬる

雜

波のよるまもなきを

思ふらす

思ふもの

又永実信濃守

のりをきゝはたして

ゆくゑふかゝり

右京大夫実清

大納言経宣朝臣

月のあるにゆきゝ

ゆくゑふ月入

三のまいの頃

月入ぬるにおもひ

おりんくなるほを

月のうちてゆくを

小一条院御製

池のにやとれる月をみる

右京大夫雅仲

下萠ふこえらぬ
歌さゝ葉もり考
世中をとゞひる入てみるさ
田家月といふ心を
月清き田中に雁そらゝ信ありて
新院御製
物おもふ女房の中に
ありあけの
月乃あるを
浪のうち月乃光よりそへて雲ぬれ
ぬる
権大納言
良経
松ちる月乃
影しらす
くもるとおもふこのさと松乃下時雨ぬる
山家月
ひさに出て三あへき雲とて乃月よ
新院御製
秋人よあまの
平忠盛朝臣

題不知

柿本義明朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大納言実

[illegible]
[illegible]

花山院御製

[illegible]
[illegible]

大納言

[illegible]
[illegible]

中務卿親王

[illegible]
[illegible]

大江為言

[illegible]
[illegible]

左京大夫顕輔

よもすがら雪をおもねよ雲消て清見が関の月
山城よなりて欲絶るや月入あらまけり
秋まりて年も老人のいとふて問給
まてしまあり

山城の岩間も松のいとなくてせ月け
ひさしく老せぬ人のうき秋ひ
つりけり

中原芸國

月ふそ昔おもおもし我と思ふ人をや
山ちか寺ふまりけり宋延法師よなひ
てよもすから松のひ絶るに五月雨

さみだれのふりけるとてまあり

琳賢法師

なかく人思もよせんとひ出よ先山のふ月
家根おたる夜大臣家行合ふまあり

大蔵卿通房

松の実ふ松村下時て月ふりふそ出せら考
行くらふ出まてきくりともみ給け
おのあるもしまてす芸よ考月
ふてなくる給ふまあり

帥前関大臣

ふりくらしあまつ雷も八月に
ぬらす
添くへて是やこの
あひよつむしてそけふ
をくれ給ふてあや

高松上
名

なの月もあやうくなりぬ
思ひけれ
よあきそ侘ぬ
ここといひしらはけふ

いつこさぬ
ゆふくれと思ひ物をこひしらん
みつゝこひくらん五月の日より
待ても
ふるまて

あやめ草うき
保昌よわをまて
こひくらん
人をこひわふ
為尓盛房
ては秋
ねやひつ

ふる
思ひあまりそ
ぬらす

侍賢門院堀河

けさみてもいひけるものかな

秋ごとにふるとあさのをも来あいむまで家にを
友永隆時朝臣
けまいれとも忠清うよりほかをもえぬ
く忘れふるれい忠清う才隆主よあな
とさてもよいひつうけ

和泉式部

いうまいあるなまいはをいのこ月うう女
ぢうす

友永忠清

相撲

往古のそそかぶをいふみをけく添さふまを人ふる
りのこひけうこうあう

大納言道綱母

ぬうあれおともれつう添ふおをとひてけい
ふとなきうひをいのれをおうれいをす
うなあおうて左の月ふまよおく
おけうう俄よきこし河あけうとんく

前深水

神今月左前の宮ふるとふ又我るぬ人やみうん
ふのひてうのふひけうふうあう

生駒舞

和泉式部

大貳三位

右大弁俊雅母

武部大輔資業

いそう松を指して
冷泉院へ参りけるを
よませ給ける
世中にふるひとも
なし
年のみ行のみやこ
人ことしみくまの
あれをみる山の嵐も
行のみふるさと
いつこも
花山院御製
冷泉院御製
（欠）

納言公任
もろともに山吹の
後二条関白
けまし家のうち
女房なりふいひ入
源仲正
三笠山出すふる雪
おもやけの
えやゆるして

百首歌たてまつりし時

平敦経

恋ひそめてうきにたえぬる涙川
長恨歌のこころをぞくむ

恋ひそめて袖にたえぬる涙川
みちのくぶすまの下に朽ちそめてこそ

源道潤

くまの松のなかりせば

権中納言朝忠

たのまじ我いのちをばなにをかは
世にふるかひのあらまほしきは

出村雨

松の葉の末葉ばかりぬれそめて
紅葉の錦ひとしきりこそ

左京大夫顕輔

紅葉の錦ひとしきりこそ
てやまじよもぎのもとの露

高内侍

秋の露数の中にもあるものを
袖にのみ置きまどはるる

堀河院御時百首歌たてまつりける

大納言師頼

月ぞさやけきあはれとも思ふ人さへ

雑下

題よし住僧くおそにあるみとふかま
りてつかう

源俊頼朝臣

萬灾燒まやもをみうら世中をあくれいつそそり
女とりの浮よわふつむをみく
後乃ち忘く搦浮も落ぬいつまて世つき撃ぬん
心信して殿上おりて約うし鶏鳴皐とふ
ことをつかう

前京云重朝臣

昔も雲ねと忘て萬うしの浮へよ鳴や撃ぬん

新院六条殿よりはしけう時月のあく
る約う来ふめして月前言志とふを
をうまて行けうふよみ約うり

右近中将敦長

三日月乃之空のよあやうや世をめうあめん
秋も光のうをそつかう

前京実方朝臣

あもよみりやあん芝来うその云まてとふねん
世乃なう浮うくこそんけうを

増基法師

秋の野をとまりもとめぬ風よりも
とそそめる
　源親元
荒藩もの心にいつもわすれぬ
心ゆ例のすすきかな
　宗祇中文
けり
よそにみてもる来れ白露
世中をそなくおもえばを
けり
うつつとそ夢ん時ふ
　花山院御製

入日さす野もの心をさそてそある
　いつもさそふ
夕雲雀あそる通さ繁の
大納言忠教月
なくとさそてそある
　後京極良経
常夏の露ふ波のおもうれ又りや老におりんとも
そうあさるのつまあくさえけりよ
　法橋昌清
みふ人の昔そうに故郷をいまそそにさう生すん

夏の秋をよにそみ侍りけるに
ゆふやみのいとくらきに侍りける
　　前拾遺　祝部仲女

題不知　　良暹法師

おもふらむこころをみねのまつ風に
　大江嘉言朝臣
吹はらふよもあらしなりけり

　　前深養父

うらみてそわたるあきのよをかさね
やまひをりくなりて京へまかりいでて
物をいまいもにおくりてつかはしける
　　大僧正行尊

題不知

　　大僧正行尊

こゑたえぬものとはなしにうぐひすの
人のしめをもなどかとがめん

この月をいもるとおもふ

清基法師

良暹法師

賢智法師

大江公言

大江匡房

小式部内侍

伊勢大輔

和泉式部

赤染衛門

相模

右京実宗ひとり
のつひとてさ
よいひく
けまていひつ
ひくふふく
下藤よこえら
人のりへ
もけ
ひとく里をいてく

河院位よりまつ
季よつまてやく
乃ちくてうり
しけり

雲上六月七日よさ
うへ
そこうちまをしあ
新院位よりはしめ
とめて述懐の
白河院乃ゆる

大宰大弐肥後
大中臣能宣朝
大宰大弐季
津守国基

大納言成通

白河のあたりを来むとそ思ひしを
雪に消えて知へ
雪ふりて年の暮ぬる時しかは
いつこを指とかたまりもそする

大蔵卿匡房

夏の来(き)よやうちてしも卯の花の
むすほれてのみ雪ふりにけり

源義国妻

あやめふきあやめ作るその枕の形見とみよ
たれか手ふれ捕あふ物ならむ時とを
さこりにまりもあらなくに

閑白前太政大臣

ひとりぬる袖をなにもとかこたむ
新院位よりおりて後
ふるとしの雪を行けるふるあめ

雷の清出てみまほしき人
後冷泉院御時大葬命婦
風よ備中国あまつ山おろしの人
死つとそうらうそうそうふるあめ

前右京権大夫

ふりもてゆくよのおとさへ更行

今上大葬會終紀方に奉風す　近江國
あてゝ　山田よりねおくりつかはしける
人〻をかきあつめてよめる

権会の山田よつゝきてをくれ
ぬるかなしさをそへてけるかな

太宗太夫清輔

水上のさゝめてをくれ行く空もあつ世のあ
あるまゝにゆふ雲ありけるふまあ

宮内卿女

いさやまこつゝきてをくれ
悲歎へまゝてけるたみ人あそふ

道命法師

那そなあ月の袖なる時雨より
そゝ雨よ物思ふ時月をそてあ

神前内大臣

那そなあ月をみる時の袖をも
信濃なるみくまの河の藤のそとそ思ふ

為家家経朝臣

てゝあ

さゝれ岩の上ふくみ河の雲いふりとゝまるそてゝ

右京權亮朝臣
りふまりてそのもち月をて招ま
よなりてそりはくあり井とふ
泉をかくしもあり

青山の井はあふさわ
神前内大臣播磨へまりきりともみく
河底を出る日しあり

思ふ乃あれなての宮れそ哀成きり

右京澄理朝臣

大江匡言

三条左大臣月ゆりて月をみくよ
めり

前大納言公任

いつへと急る波よてまてをふ秋月
むすめふをくまく歌ひつりき
あくつけ歌ひ人よ月の

源川右大臣

そのとこのあふもあるをもて月をみん
栗田右大臣月ゆりふけりまあり

右京權亮朝臣

若あてみもあふさわいとも歌

あさまや元よさす（さ
大江通綱 月前
てよめる

こそ其雲井は近も咲
後冷泉院御 時
くれなゐ
源のこ枝よう
おとふ

祢祇部仲
雲深の衣袖をわるらす
遠山 月
雁
赤染衛門
別のそらまて
御 ふみを
けまいなり

有信朝臣
月ありそ
ま

おくのつゝさをなみ欲さきんやそもさもあ
人乃宇九日乃 雨
人とふ種のおもう
まるまりして
のちもうく
けり

読人しらす

源中文

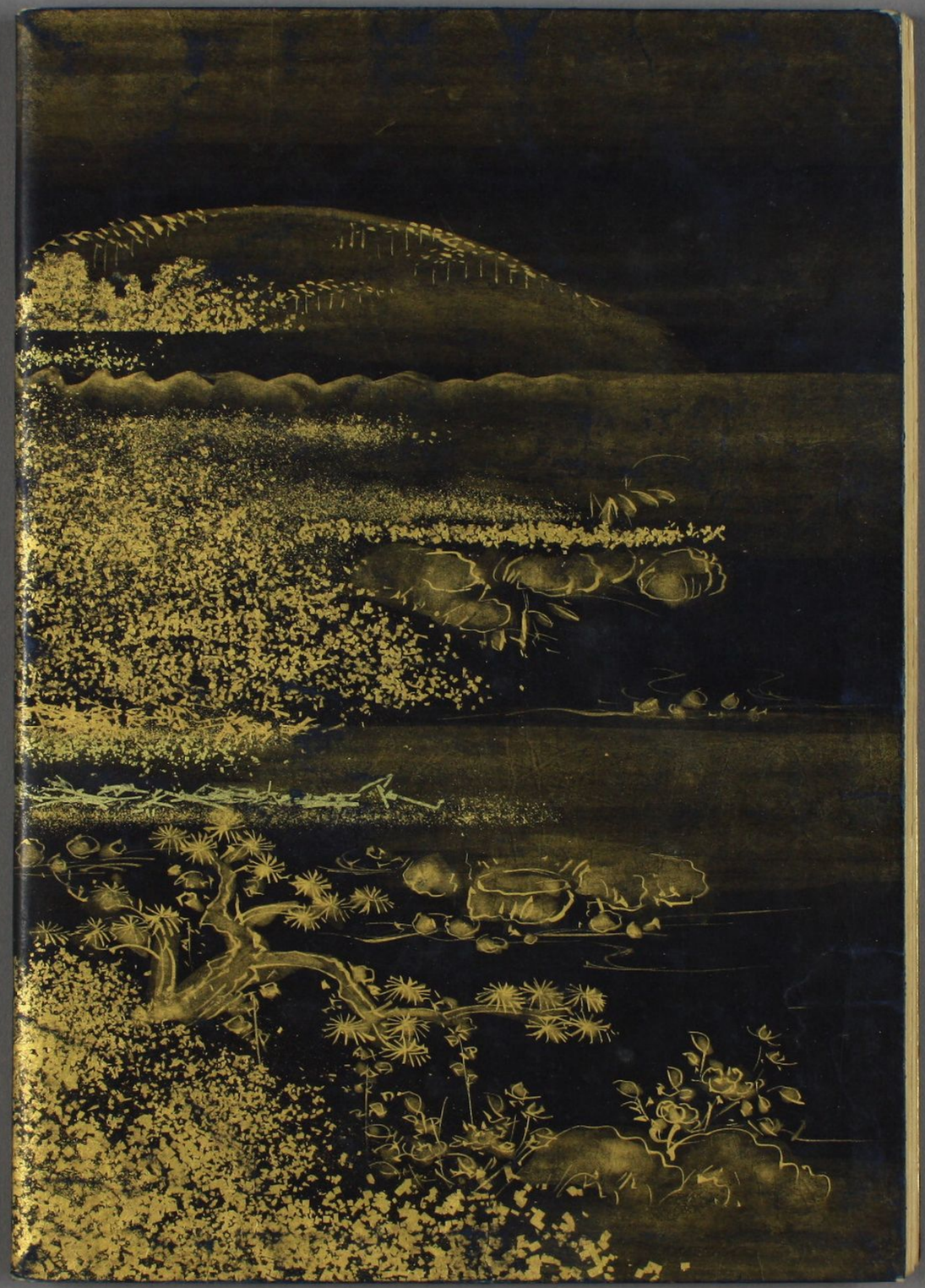
そもそもみそあまりて世の衣ころもを
いなり乃高花
よみ人しらす

くてのごとふを生ぬ月ま雲にてよそてる神
おやそな分をゆへ人まをそしけっ
とこのまことろ稲荷ありおへと稲荷ようまて
新中考ふ神即ち若小社のやまひ
出ありけりっ
なるのごとくらんりやうを
賀茂乃いつさとをけっ対面よもひて
よめっ
　　還子内親王
心とものむそいねとまれるふむそれまを
信解品同況領悟無上道
即身成佛とよめっ
　　よみ人しらず
病の身消て仏よあらさ百とせのまてそ心ひらく
今利益乃法よりて彼成佛乃のくとに
ま年也ぬけふみ仏けっ
　　関白前左大臣
ふそこなて仏のたを敬ん我心こそ三つへ女けま
　　左京大夫顕輔

いそぐ我心の月を雲かくしてやまにまつ人を照さん

常在靈鷲山のふもとあり

世の中は人のこゝろも雲ふかくして

登蓮法師

五百乃月